

日本占領下の旧オランダ領東インドにおいて、「現地女性」と「日本兵」の間に生まれた子どもたちが、戦後オランダに移住した後、いかに自身のルーツを認識してきたのか、またポストコロニアルな集団的語りが「子どもたち」の父親探しに与えた影響を考察する。多くの「子どもたち」は幼少期に父親の存在を知らされず、成人後にルーツを知ったとしても、公に語ることは容易ではなかった。近年「日系オランダ人」という語で語られる中、朝鮮半島・台湾出身の父親やインドネシアという占領された側の歴史的な文脈が語られにくい。本研究は、国家の枠を超え、朝鮮半島・台湾出身者を含む「トランスインペリアル」の視点やインドネシアの視点を交え、この問題を再考する。子どもたちによる父親探しが個人のルーツ探しにとどまらず、戦争や植民地支配の記憶をどのように社会が受け止め、語り継いでいくのかという課題に新たな視点を加える可能性についても検討したい。